

グローバルゼーションを問い直す

～南北問題へのアプローチ～

はじめに

前回の勉強会ではグローバルゼーションにおける文化的側面からの考察を試みたが、今回の勉強会では主に経済的な側面からグローバルゼーションに光を当て、特に第二次大戦以降問題となり、未だその解決の糸口が見えない南北問題へのアプローチを試みたいと思う。具体的には、南北問題の背景にある資本主義についての問い直し作業から、私たちが進むべき新たな道を模索してみるというものであるが、今回提示する内容は南北問題への具体的な対策方法ではなく、あくまで理念的なものにとどまることを初めに断っておきたい。

1、南北問題とは何か

- ・南北問題...先進国と発展途上国との間で、経済的な豊かさに大きな格差があるという問題。

世界全体の人口分布

先進国：約2割 発展途上国：約8割

世界全体のGDPの割合

先進国：約8割 発展途上国：約2割 図1参照

南北問題の原因

発展途上国の経済は農産物や水産物などの一次産品の輸出に頼っているが、先進国の輸出する工業製品に比べ、一次産品の価格は激しく変化する傾向にあるため、輸出が不安定になり、発展途上国の経済開発が妨げられているため。

その他、発展途上国には経済格差の問題に付随するかたちで人口爆発、環境汚染、紛争、砂漠化などの問題が残されている。

2、世界システム論から見る資本主義

(1)世界システム論

社会システムの変化

- ・「ミニシステム」... 統合の原理は互酬性に基づいており、文化・政治・経済のいずれのレベルにおいても一元的である。
- ・「世界帝国」... 統合の原理は再分配に基づいており、文化的には多元的であるが政治的・経済的には一元的である。
- ・「世界経済」... 統合の原理は資本主義に基づいており、文化的・政治的には多元的であるが、経済的には一元的である。

「中核」と「周辺」

- ・「中核」... 「周辺」との間の壮大な分業体制を利用してシステム全体の経済的余剰の大半を占めている国。製造業や第三次産業に集中。
- ・「周辺」... 経済的に「中核」に従属させられる国。鉱山業や農業などの第一次産業に集中。
- ・「半周辺」... 「中核」と「周辺」の中間に属する国。

「ヘゲモニー」

- ・「ヘゲモニー」(覇権)... 「中核」諸国の一国が生産・流通・金融の三層すべてにおいて他の「中核」諸国を圧倒的に優位する状態。

17世紀のオランダ、19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ

(2)史的システムとしての資本主義

万物の商品化

資本主義によって商品だけでなく、その商品にかかわる生産過程や労働力なども商品関係に転化し、世界全土を巻き込んでいった。



- ・生産的労働と非生産的労働という社会的区分が施しによる格差の正当化
- ・利潤の押し上げによる「周辺」地域の拡大、及び固定化

反システム運動

資本主義による労働者のプロレタリア化が進むと労働・社会主義運動やナショナリズムが勃興する。

ルーマンによる批判

結局、資本主義は豊かさや安全性、自由や平等といった点で進歩したとは言えない。

→ 資本主義という史的システムを変えなければ、南北問題は解決できないのではないか

3、資本主義の先を模索する

(1)交換の再定義（柄谷氏）

歴史における交換様式

- ・ 互酬的交換... 恩による贈与と返礼 共同体内で成立
- ・ 再分配... ひとつの共同体が他の諸共同体を継続的に支配するときの支配者と被支配者の交換様式（略取 - 再分配） 国家内で成立
- ・ 商品交換... 相互の合意に基づく貨幣と商品の交換 共同体間で成立

新たな交換様式

- ・ 交換様式 X...)市場社会下で互酬的交換を取り戻す。
)共同体・国家の否定
)普遍宗教的

(2)現代アソシエーション論（田畑・松尾氏）

社会的編成の基本類型

- ・ 自生的共同体（ゲマインシャフト）... 個人が埋没した閉鎖的共同体
- ・ 権力社会（ヒエラルキー）... 互いに孤立した諸個人が上位の人格に従属する社会
- ・ 商品交換社会（市場）... 自立した社会が孤立してモノを媒介してつながる社会
- ・ アソシエーション

社会システムの分け方

- ・ 疎外 - 共同決定
- ・ 閉鎖社会 - 開放社会

図 2 参照

アソシエーションへのアプローチ

- ・自生的共同体 ネットワーク拡大、多重帰属
- ・権力社会 民主主義的、国家に拠らない
- ・市場 下からの計画経済



自由な諸個人が共同意思に基づいて活動や物件を統合することによって形成する社会
(ex:NPO、協同組合)

(3)現代アソシエーション論 (佐藤氏)

- ・アソシエーション...市民的公共圏における、ある課題について話し合う多種多様な個
体群
- 非市場・非国家的で市場や国家に異議申し立てできる存在
(コミュニケーション行為・ボランティアの重視)

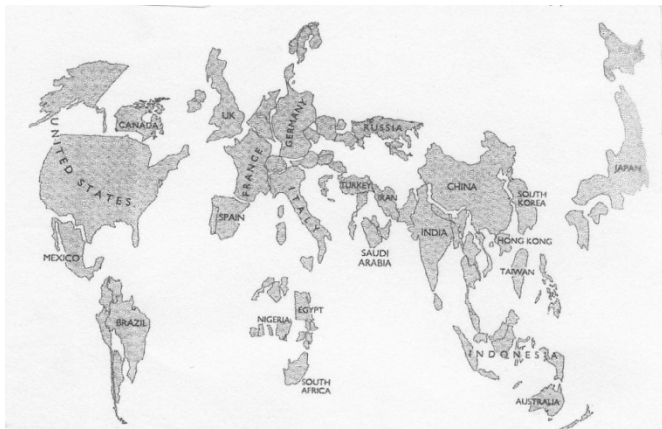
今後の課題

- ・マルクス、ハーバーマスの議論をどう現代に生かすか
- ・理論をどう実践していくか

おわりに

今回は南北問題という観点から資本主義にかわる社会の可能性について取り組んでみた。だが、今回の発表では南北問題を解決できるような理論には到底及ばないし、まして実践するには 100 年早いと思わせるほどこの問題の深刻さに気付かされた。また、資本主義は人類にとって最もすぐれた社会システムなのかと考えさせられた。しかし、私たちが進むべき最善の道を模索するべき必要はあると思う。そのためにもアソシエーションという議論を単なる思考実験に終わらせず、未来への手がかりにするべきなのではないだろうか。

図 1



【参考文献】

伊豫谷登士翁 『グローバリゼーションとは何か 液状化する世界を読み解く』
平凡社新書 2002年

柄谷行人 『世界共和国へ』 岩波新書 2006年

川北稔 『知の教科書 ウォーラーステイン』 講談社 2001年

佐藤慶幸 『NPOと市民社会 アソシエーション論の可能性』 有斐閣 2002年

田畑稔 『マルクスとアソシエーション マルクス再読の試み』 新泉社 1994年

松尾匡 『近代の復権 マルクスの近代観から見た現代資本主義とアソシエーション』
晃洋書房 2001年

I.ウォーラーステイン著 川北稔訳 『史的システムとしての資本主義』 岩波書店
1994年